

「属性叙述」表現に関する日中対照

—「(～だ)と(～だった)」を巡って—

周 国龍¹

要旨

名詞述語文と形容詞述語文において、テンスの介入の無い場合、事象の「内在的な属性」を表す。テンスの介入があれば、事象の「非内在的な属性」つまりある特定の一次的な様子を表す。その場合、話者は発話時点から見た事象の発生時間との間隔を見計らって表現形式が選択される。日本語には現在形と過去形の表現形式が備わっているため、そのような選択は容易にできるのであるが、中国語は日本語のように過去形の表現形式は備わっていない。そのため、日本語が過去の表現形式で表した意味を中国語では同じく過去の表現形式を持ってその意味を表すことは不可能に近い。即ち同じ意味を表すのに日中両言語の表現形式の有無による表現方法の違いが生じるわけである。

本稿は日本語の「非内在的な属性」の事象を中国語では「事象叙述」という表現方法を持って補っている場合があることを明らかにした。

キーワード

属性叙述, 事象叙述, テンス, 名詞述語文, 形容詞述語文

1. はじめに

日本語の名詞述語文、形容詞述語文（含形容動詞述語文）において、現在形「～だ」と過去形「～だった」^(注1)という表現形式があり、必要に応じて使い分けることができる。

一方、中国語の「了」^(注2)は動作動詞を用いた表現において過去形として使われるが、名詞述語文と形容詞述語文には過去形としては使われない。当然ながら、中国語の名詞述語文、形容詞述語文も意味上では現在形か過去形かで使い分ける必要はあるが、はっきりした過去形の表現形式はなく、日本語のように現在の意味か過去の意味かを表現形式をもって区別して表現することは難しい。そのため、特に日本語の過去形の表現になると、中国語の過去形でその意味を表すのが困難である。まず、例をあげよう。

1. (死ぬまで一緒に信じてた) 私馬鹿です。馬鹿でした。 (『夢追い酒』歌詞)

訳：我真笨啊，真是个傻瓜。

(<http://blog.xuite.net/chuzu0/twblog/153294232>)

¹ 国際人間科学部国際学科

「馬鹿です。馬鹿でした」は「我真笨啊，真是个傻瓜」と訳したのは意味的に日本語とのずれは生じていないのか、たとえ訳者が意味にずれがあると理解しているとしても、日本語で表そうとする意味を似た表現形式で簡潔かつ正確に中国語に訳して表現することが可能であろうか。たとえば「馬鹿でした」を

？ 2. 真是个傻瓜了。

と訳したら、日本語のニュアンスを的確に表現できたのであろうか。

3. 結婚詐欺です。信じた私がバカでした。(https://danna-shine.com/note-5367)

？ 4. 訳 1：这是婚骗，相信了他，说明我是个傻瓜了。

5. 訳 2：这是婚骗，相信了他，我上当受骗了。（我做了一件傻事。）

3は結婚相手信じて結婚したという事象について、自分がばかだったという意味で過去形が用いられた日本語の表現形式である。4は日本語と同じように、「了」を用いて訳せば、話者の属性が変質して利口な人から愚かな人になったという変化の意味を表すことになり、日本語の意味との微妙なずれが生じてしまい、日本語で表そうとする意味からかけ離れてしまったたわけである。5のように、「動詞+了」を用いて「事象叙述」で表現すれば、なんとか日本語の意味に近い表現になったと思われる。

このように見てきてわかるように、中国語は形容詞述語文の表現形式において日本語のように過去形に訳すことがかなり困難である。日本語に相当する「非内在的性質」を表す表現形式では日本語の表そうとするニュアンスまで表すことができないどころか、意味自体が変質してしまうのである。日本語のニュアンスを表そうとするならば、日本語と異なる表現形式つまり動詞を用いた「事象叙述」という表現形式で表さなければならないのである。

6. 女優樹木希林（きき・きりん）さん（本名・内田啓子＝うちだ・けいこ）が 15 日に都内の自宅で亡くなったことが 16 日、分かった。75 歳だった。

(https://news.yahoo.co.jp/pickup/6297104)

この場合、「75 歳だった」を「75 岁了」と日本語の表現形式に沿った訳し方では明らかな誤訳になる。「(是) 75 岁」と訳したら、意味的には近いかもしれないが、日本語のニュアンスまで表すことができたとは言いがたい。このような場合、中国語では現在形のままの表現形式でいいのに、何故日本語では過去形になるのか。日本語は現在形も過去形も使われるのに対し、中国語では基本的に現在形で使われるが、過去形として使えたとしても、日本語の過去形の意味とは大きく異なるのである。

日中両言語の名詞述語文と形容詞述語文の現在形において、表現形式と意味はほぼ一致するが、過去形において、日中両言語の間で微妙なずれが生じる。

本稿は名詞述語文と形容詞述語文における日中両言語の表現形式に現れるそのずれを考察し、このような微妙なずれがどこから生じてきたのか、明らかにしたい。

2. 先行研究

名詞述語文、形容詞述語文における日中両言語の違いに関する考察をするにあたって、まず、先行研究を見てみよう。

益岡(2000)はまず、名詞述語文、形容詞述語文を「属性叙述」表現に、動詞述語文を「事象叙述」表現に分類した。「属性叙述」表現は、「時間的な制約を受けることはなく、普遍的な属性を表している」表現を「内在的属性叙述」表現とし、恒常的・超時間的な属性を有し、テンスは関与しない。」という特徴がある。次のような例を挙げている。

7. 日本は島国だ。
8. 雪は白い。
9. 花子はおとなしい。

また、

10. 鈴木先生は以前は生徒に厳しかった。
11. 花子は今日おとなしい。

といった例は「属性叙述」性質を有しながら、時間の流れの中で可変的で、「以前」、「今日」といったテンスの介入を許す特徴があることを指摘し、この類の表現を「非内在的属性叙述」表現としている。

このように、益岡は名詞述語文と形容詞述語文の「属性叙述」表現とし、これら「属性叙述」表現をテンスの介入の有無によって、更に「内在的属性叙述」と「非内在的属性叙述」に分類した。テンスの介入がなければ、「内在的属性叙述」であり、テンスの介入があれば「非内在的属性叙述」になる。

この「内在的属性叙述」表現と「非内在的属性叙述」表現、「事象叙述」表現という分類の考え方は日本語の特質に基づいているが、本稿も基本的にこの分類の考え方に従って、中国語の同類表現との対照研究をし、日中両表現の異同点を明らかにしたい。

3. 日中両言語の表現形式における違いについて

日本語において、「属性叙述」表現は多くの場合、「恒常的・超時間的」といった「内在的属性叙述」表現も含め、実際の話の流れの中で、その殆どがテンスの介入を許し、「非内在的属性叙述」表現に変わる。これは日本語の表現形式上既に現在形「～だ」と過去形「～だった」の対立で「内在的属性叙述」表現で表す手法と「非内在的属性叙述」表現で表す手法が備わっているからである。

中国語にははっきりしたテンスの表現形式はないと言われているが、「了」は一応過去を表す機能を有する。また、名詞述語文「是」に「了」を付けて、「是+了」に、形容詞述語文に「了」を付けて「形容詞+了」の表現形式はある。しかし、この表現形式は益岡(2000)の言う「属性叙述」表現でなくなり、変化を表す「事象叙述」表現に変わる。「属性叙述」表現を表す名詞述語文と形容詞述語文において過去を表す表現形式はないわけで

ある。表現形式上から言えば、「内在的属性叙述」表現だけで、「非内在的属性叙述」表現には時間の言葉の助けが必要になる。そのため、中国語は「内在的属性叙述」表現はあるが、テンスを介入させて表す表現形式は名詞述語文と形容詞述語文自体には備わっておらず、過去の時間を表す言葉で補足的に説明することで、「非内在的属性叙述」表現にとどまるか、「動詞述語文」即ち「事象叙述」の表現形式を用いて表現しなければならない。日本語に照らしてみれば、中国語の名詞述語文と形容詞述語文の表現形式自体には「非内在的属性叙述」表現を表す表現形式が欠如していると言えよう。その欠如した「非内在的属性叙述」表現を過去の時間を表す言葉で補うか、「事象叙述」の表現形式を持って表さなければならない。

このように、日中両言語間の表現形式においてその違いがあることが分かる。

4. 日本語の「属性叙述」について

日本語の名詞述語文と形容詞述語文は「属性叙述」であり、更に「内在的属性叙述」と「非属性叙述」に分類される。その分類のポイントはテンスの介入の有無である。日本語において、現在形と過去形の表現形式があるから、いずれも必要に応じて表現できる。日本語の名詞述語文では現在形の「だ」と過去形の「だった」という表現形式があり、同じく形容詞述語文にも現在形と過去を表す表現形式がある。このような表現形式があるから、話者の表そうとするニュアンスをより繊細に表現できると思われる。以下、例を挙げて、具体的に見ていこう。

12. 私馬鹿です。馬鹿でした。

これは修辭的に「です」、「です」という同じ言葉の反復を避けるために、「でした」を用いたのではなく、今度の失恋をしたことにより強い悔しい、悲しいといった気持ちを表すために用いた修辭法だと思われる。「私馬鹿です」は「内在的属性叙述」表現で、「私」の「知能が劣り愚かだ」という本質的な属性を言い表している。一方、「馬鹿でした」はもともと「知的に愚か」である上に、テンスを介入させることにより、「非内在的属性叙述」で今度の失恋の一件もまたまた思慮不足による失敗を招いてしまったという気持ちがにじみでている表現となった。この例を見れば、「内在的属性叙述」表現と「非内在的属性叙述」表現を同時に用いて、自分を責め、また悲痛な気持ちをより強く表す表現になったわけである。

13. 結婚詐欺です。信じた私がバカでした。 <https://danna-shine.com/note-5367>

「です」を見れば、まだ離婚には至っていないことが想像される。しかし、信じて彼と結婚した自分の行為は「馬鹿でした」。つまり、結婚するという個別的な行為自体は失敗したため、愚かなことをしてしまったという気持ちを表している。自分が属性的に馬鹿かどうかは言及していないわけである。

また、人の失敗を見て、

周 国龍, 「属性叙述」表現に関する日中対照

14. 馬鹿だね。(作例)

15. 馬鹿だったね(作例)

両方とも言える場合が多いであろう。しかし、双方の意味のニュアンスには違いがあるから、言われた方の受け止め方も大きく異なるであろう。14のほうは人の本質にも言及しているようなニュアンスが秘められていて、よりきつく感じられるであろう。「だ」ではまさにその人の属性を指し、本質的に「おろか者」だと言われたに等しい。一方の「だった」はその人の本質に言及したというよりも、ただその失敗した事象に対して責められたに過ぎないから、「だ」よりは気持的に幾分受け入れやすくなったであろう。

16. 女優樹木希林(きき・きりん)さん(本名・内田啓子=うちだ・けいこ)が15日に都内の自宅で亡くなったことが16日、分かった。75歳だった。

<https://news.yahoo.co.jp/pickup/6297104>

17. A1: 樹木希林は何歳ですか。

B1: 75歳です。

18. A1: 樹木希林は何歳でしたか。

B1: 75歳でした。

生きている時にはその人の属性の一部なので、テンスの介入する余地はない。だから、もし、17のように「です」を用いての会話なら、通常「生きている」を想定しているであろう。人間の属性の一つである年齢自体に変わるわけがないからである。しかし、亡くなった途端に本来属性である年齢に区切りが付き、この区切りのついた時点と話者の発話時点の間に時間的間隔ができ、つまりテンスの介入が可能になり、「非内在的属性」と捉えて、18のように過去形が用いられたわけである。

19. 私は大学生です。

20. 私は大学生でした。

現役の大学生であれば、当然「私」の属性である「大学生」という身分として「内在的属性」を有する。しかし、既に区切りのついた過去のある時期なら、テンスの介入が可能になり、話者の発話時点は事象発生時間との間において、時間的な間隔ができたわけである。この時間的な間隔が表現形式によって反映されなければならない。そのため、日本語において、「でした」が必要になる。

このようなところを見てくれば、「内在的属性」表現は事象の恒常的な属性を話者が静的に描写するだけだから、そもそもテンスの存在する余地もほとんど無いと言えよう。一方、「非内在的属性」表現は事象そのものの恒常的な属性を表そうとするのではなく、話者が自身の発話時点と事象の発生時間の間隔を捕らえて表現するわけであるから、テンスの介入が可能になるわけである。

日本語において、テンスの介入がなければ「内在的属性」表現となり、テンスの介入があれば「非内在的属性」表現になることもできる。これはまず日本語では両方を表す表現

形式が存在するからであろう。日本語の表現形式で、名詞述語文に現在形の「だ」もあれば、過去形の「だった」もある。同じく形容詞述語文にも現在形もあれば、過去形もある。だから、話者が必要に応じ、自在に使い分けが可能なのである。

5. 中国語の「属性叙述」について

中国語で表現する場合に同じく日本語のように「内在的属性」表現、あるいは「非内在的属性」表現のように表すことができるか否かを考える時、中国語において「内在的属性表現」を表す表現形式は存在するが、日本語の意味と同じような「非内在的属性」表現の過去形表現形式は存在しない。中国語ではいわゆる過去形を表す「了」はこのような名詞述語文や形容詞述語文といった動作性のない述語に付く場合は過去の意味を表すのではなく、変化か変化後の状態の継続の意味を表すことになる。従って、テンスの介入がなく、内在的属性を表す場合は、日本語と似た表現形式で表すことができるが、「非内在的属性」表現におけるずれが生じているため、日本語と似た表現形式で表すことができず、「事象叙述」表現で表すことになる。

20. 私は大学生です。 我是大学生。

しかし、テンスの介入があった表現形式の「だった」に対応する表現形式はない。

21. 私は大学生でした。 ?我是大学生了。

22. 我是大学生了。 私は大学生になった。

この場合、日本語は過去を表す時間の挿入により、表現形式も過去形でなければならぬが、中国語には過去の表現形式は無いため、過去を表す時間の挿入だけで日本語の表現と同じ意味として対応するわけである。

23. 十年前、私は大学生だった。 十年前，我是大学生。

? 24. 十年前、私は大学生だ。

このように名詞述語文の過去形では表現形式上における日本語と中国語との間にずれがあることが分かる。表現形式におけるずれはあるが、テンスの介入の有無という点から見れば、共に「非内在的属性」表現と認めてよかろう。

25. 75歳だった。

? 26. (是) 75岁了。

27. 享年 75岁。

28. 活了 75岁。

26は「75歳になった」という意味である。明らかに25の日本語の表現の意味とは違うから、26の中国語では表現できない。27「享年 75岁」の「享年」は「年を享ける」で、そのくだけた言い方は28の「活了 75岁」である。23は両方とも過去の時間を表す言葉の挿入が可能であるが、25、27、28のように両言語とも過去の時間を挿入することができない。しかし、日本語は過去を表す表現形式があるから、依然「非内在的属性」表現に属す

る。一方、中国語には過去を表す表現形式が無い上、過去の時間を挿入することもできない。「了」を動作動詞でない「是」に付ければ変化を表す表現形式になり、「(是) 75 岁了」は 75 歳になったという意味を表すことになる。例 23 と違って、「非内在的属性」表現では表すことができずに、「享年 75 岁」或いはそのくだけた言い方で「活了 75 岁」と動詞を用いて表現しなければならない。つまり中国語では「事象叙述」表現になるわけである。

同じ事象を表現するが、表現形式において、日本語は「非属性叙述」表現で表現できるが、中国語は「事象叙述」表現で表さなければならなくなるわけである。

「馬鹿です、馬鹿でした」の訳「我真笨啊，真是个傻瓜。」は誤訳とまでは言えないにしても、日本語のニュアンスが反映されたとも言えないであろう。「我真笨啊，真是个傻瓜」の「我真笨啊」は「形容詞述語文」で、テンスの介入がなく、「我」の性質・属性を表す表現である。また、「真是个傻瓜」は「名詞述語文」で、同じくテンスの介入が読み取れなく、「我」の性質・属性を表す表現である。つまり、両方とも「内在的属性」表現である。前に分析したように、「馬鹿です」は「私」の性質・属性を表しているのに、「内在的属性」表現であるが、一方「ばかでした」はテンスの介入により、「非内在的属性」表現である。だから、「真是个傻瓜」は日本語のニュアンスを正確に表現できていないわけである。そのニュアンスも正確に表現しようとするならば、テンスの介入の余地はまったくないとまでは言えないかもしれないが、よりの確に表現するにはやはり「我上当受骗了」、あるいは「我做了一件傻事」といった「動詞述語文」で表現したほうがより適切であろう。日本語の「馬鹿でした」は人の性質・属性を表すのではなく、ある事象について表述しているだけだからである。ただ、日本語では「でした」という表現形式があるから、「非内在的属性」表現の類に止まることができるが、中国語ではこの意味を表す過去形はなく、つまり「非内在的属性」表現を用いる手段はなく、「事象叙述」表現を用いて日本語のニュアンスをなんとか表現したわけである。

このように、「属性叙述」表現において、日本語と中国語は「属性叙述」表現に関する表現形式の不釣り合いから、意味のずれを修正するために、中国語は「属性叙述」表現で表現することにこだわることができず、場合によっては過去の時間を用いて表現し、場合によっては「属性叙述」表現ではなく、「事象叙述」表現で日本語のニュアンスを適切に表そうとしていることが分かった。

6. 終わりに

「属性叙述」表現の名詞述語文と形容詞述語文において、テンスの介入の有無によって、日本語と中国語は表現形式の間に違いが見られる。テンスの介入がない「内在的属性」の特徴を有する表現において、日本語と中国語は同じように「内在的属性」といった表現形式で表すことが可能である。つまり、事象の性質・属性を表現するにはそれほど大きな違

いは見られない。テンスの介入のある「非内在的属性」表現の場合、事象の性質・属性を表現するというよりも事象発生時の一時的な様子を表す。テンスの介入が可能になると同時に、話者の発話時点と事象発生時間との間隔も表現される要素の一つとして、それを考慮に入れて表さなければならないわけである。それをどのように見て表現するかで日中両言語の表現形式の不釣り合いからずれが生じる。表現形式上、日本語は現在形と過去形が備わっており、「非内在的属性」表現形式で対応できるのに対し、中国語は表現形式で過去形の欠如を補うために、日本語のニュアンスを正確に表すには「非内在的属性」表現だけでなく、「事象叙述」表現が用いられる必要が生じる場合があるわけである。

以上、問題提起としてわずかな例を挙げて「属性叙述」表現における日中両言語間の異同点について考察してきたが、名詞、形容詞それぞれの性質をより詳細に分類し、より細かく考察して両言語の「属性叙述」表現における異同点を明らかにする必要がある。更なる考察を今後の課題としたい。

注1：「だ」、「だった」と表記しているが、簡潔に記述するため、形容詞の現在形と過去形も含めることとする。

注2：「了」の文法的機能とその意味は細かく分けられているが、杉村（1995）の記述をもとに本稿に関連する部分だけ記しておく、このように分けることが可能である。

1. 述語が行為を述べる場合、発話時においてある動作行為が発生したか発生していることを表す。
2. 述語が状態を述べる場合、発話時以前においてある状態が変化の結果として発生した、あるいは発話時においてある状態が変化の結果として発生している。

名詞述語文、形容詞述語文は基本的に状態を述べる場合に用いられるので、上記2の意味範疇に属すると考えられる。

参考文献

- 益岡隆志 （2000） 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
杉村博文 （1995） 『中国語文法教室』 大修館書店

国際人間科学部国際学科 zhou@m.suzuka-iu.ac.jp

A contrastive study of property in Chinese and Japanese —About” (~da) and(~datta)”—

Guo Long ZHOU

